特集2

# Windows 10のファイル連携を究める

近距離共有
OneDrive
LAN共有

パソコンやスマホ、タブレットなど、複数の機器を併用していると、ファイルのやり取りが必要になる場面は少なくない。Windows 10の標準機能を利用したファイル連携のテクニックをまとめて紹介する。

文：田中 雄二

## ●素早いファイル連携で作業の効率をアップする

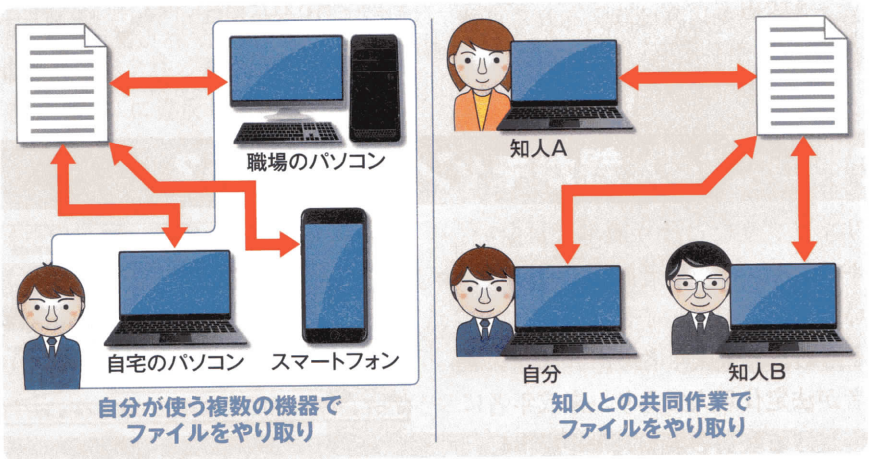


図1　複数のパソコンやスマホを利用して仕事をしていると、機器間でファイルのやり取りが必要になることが多い。知人とファイルをやり取りして作業することもある。ファイル連携の手間は最小限にして、効率的に作業できるようにしたい

## ●Windows 10が備える3通りの連携機能

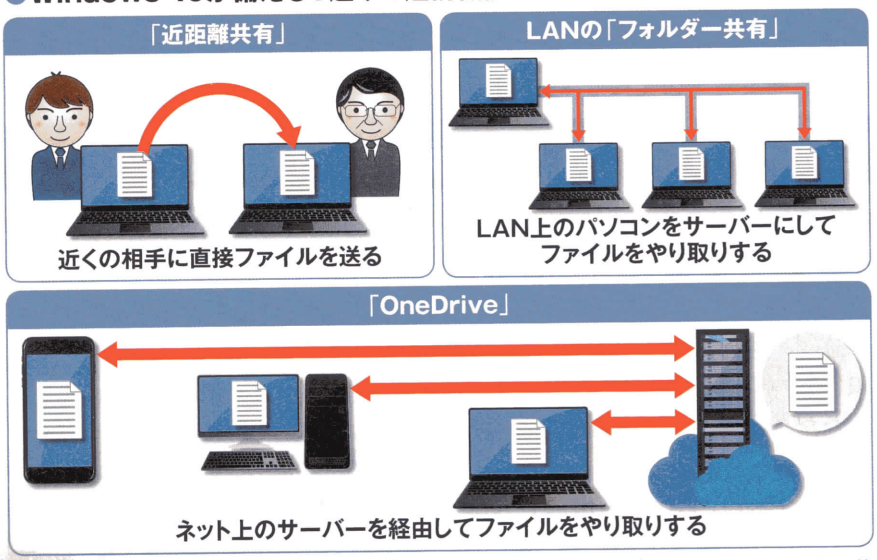


図2　Windows 10では標準で3通りのファイル連携が可能※。場面に応じて使い分け、効率的に利用しよう

パソコンで作業をしているとき、ほかの機器へファイルを送りたいことはよくある。特に最近は、多くのユーザーが複数のパソコンを使い分けていたり、タブレットやスマートフォンなどの機器を併用していたりする。そのため、ファイルの送り先は知人のパソコンなどに限らず、自分の所有するそのほかの機器であることも多い（図1）。

例えば、職場のデスクトップパソコンでプレゼン用ファイルを編集し、携帯用のノートパソコンやスマホを使って、営業先でそのままプレゼンテーションを行うなどといった使い方をしている人もいるだろう。

こんなときに役立つファイル連携の機能が、Windowsにはいくつも用意されている。特別なアプリを追加することなく、簡単にファイルの受け渡しができるので、積極的に使いこなしたい。

この特集では、Windows 10が持つ「近距離共有」「OneDrive」「フォルダー共有」の3つの機能について解説する※（図2）。場面に応じて機能を使い分ければ、ファイルの受け渡しが格段に楽になる。素早いファイル連携は、作業の効率アップにもつながる。早速、試してみよう。

※「近距離共有」はWindows 10バージョン1803（April 2018 Update）以降で利用可能

用語解説

**Bluetooth▼**
パソコンやスマホなどに向けた無線通信規格。Wi-Fiより低速だが消費電力が低い。パソコンでは、マウスやヘッドセットの接続に利用されることが多い。

**Microsoftアカウント▼**
米マイクロソフトのクラウドサービスを利用するために、ユーザーがアカウントとして登録するメールアドレス。Windowsのサインインにも利用できる。

# 「近距離共有」で素早くファイルを送信

「近距離共有」は、近くにあるパソコンにファイルなどを簡単に送信できる機能だ。Bluetoothや Wi-Fiを利用して、ファイルを送受信する。相手との認証はBluetoothを使って行うので、送信側と受信側の双方のパソコンで、Bluetoothへの対応が必要になる。

Wi-Fi機能は必須ではなく、Wi-Fiが使えない場合は、Bluetoothを使ってファイルを送受信する。しかし、Bluetoothは通信速度がWi-Fiより低い。サイズの大きいファイルを送信する場合は、Wi-Fiを利用している方が短時間で作業することができる。

## 相手を選んでファイルを送信

近距離共有を利用するためには、まずはアクションセンターにある「近距離共有」のボタンをクリックしてオンにする（図1）。

オン／オフの切り替え以外の細かい設定を行う場合は、「近距離共有」ボタンを右クリックして「設定を開く」を選ぶ（図2左）。設定アプリの「システム」→「共有エクスペリエンス」画面が開くので、この画面の「近距離共有」の項目で行う。

ここでは、機能のオン／オフのほか、受信したファイルの保存先のフォルダーを指定できる（図2右）。共有相手を、同じMicrosoftアカウントでサインインした機器に限定することも可能だ（図3）。

近距離共有をオンにした状態でファイルを送信するには、ファイルを右クリックして、メニューから「共

●アクションセンターで「近距離共有」をオン／オフする

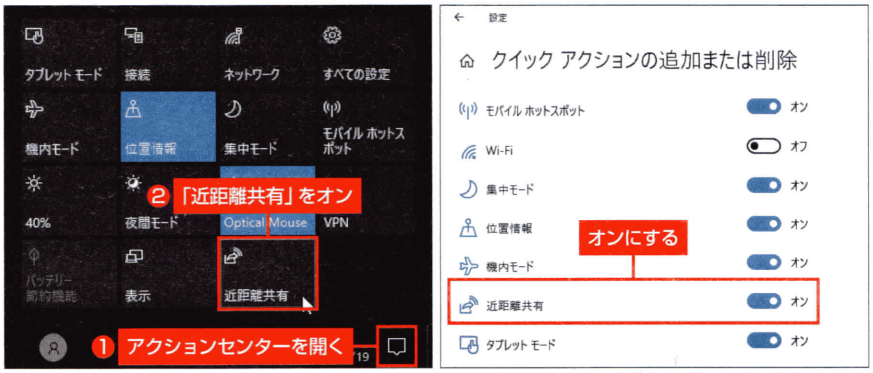


図1　「近距離共有」を利用するには、タスクバー右の吹き出し形アイコンなどからアクションセンターを開き、「近距離共有」ボタンを押してオンにする（左）。「近距離共有」ボタンがない場合は、設定アプリの「システム」→「通知とアクション」画面で「クイックアクションの追加または削除」を開いてオンにする（右）

●近距離共有の設定を確認する

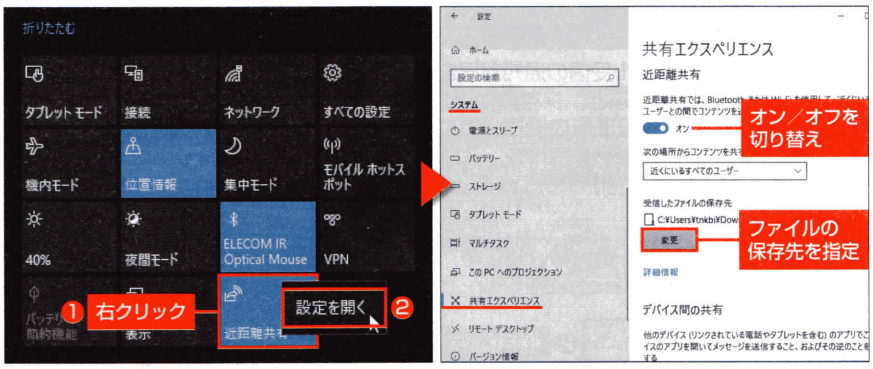


図2　アクションセンターの「近距離共有」ボタンを右クリックして「設定を開く」を選ぶ（左）。設定アプリの「システム」→「共有エクスペリエンス」画面が開き、ここで近距離共有の設定が可能だ（右）

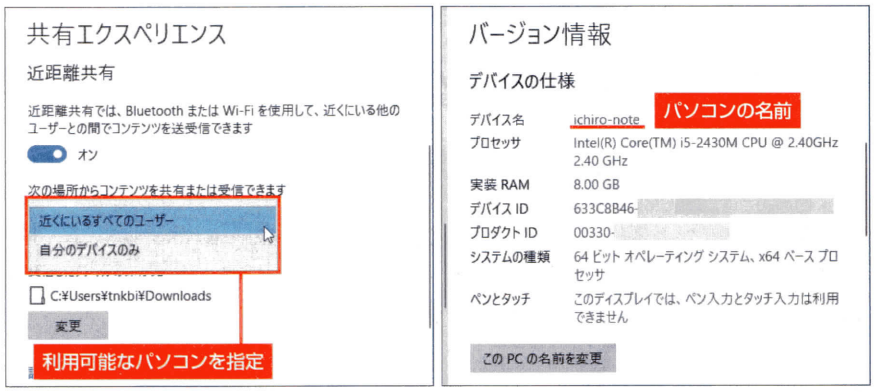


図3　図2右画面の「次の場所からコンテンツを……」の項目では、電波の届く範囲で、同じMicrosoftアカウントでサインインしているパソコンのみ利用できる「自分のデバイスのみ」と、全てのパソコンで利用できる「近くにいるすべてのユーザー」を選べる（左）。なお、相手を指定する際はパソコン名を使う。これは、設定アプリの「システム」→「バージョン情報」画面で確認と変更が可能だ（右）

## ●近距離共有でファイルやURLを送信する

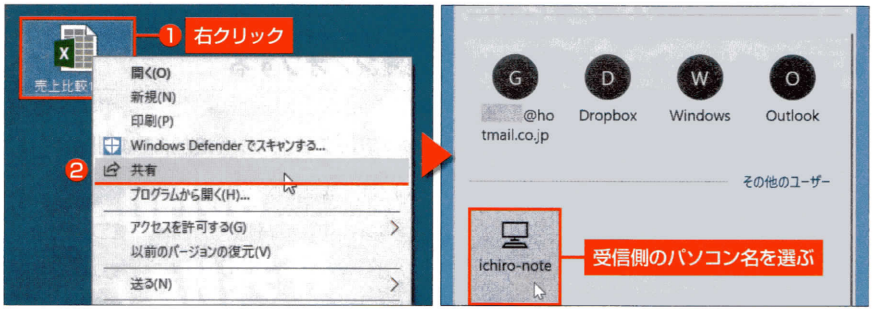


図4　送信側では、送りたいファイルを右クリックして「共有」を選ぶ（左）。開く画面で相手のパソコン名を選ぶ（右）

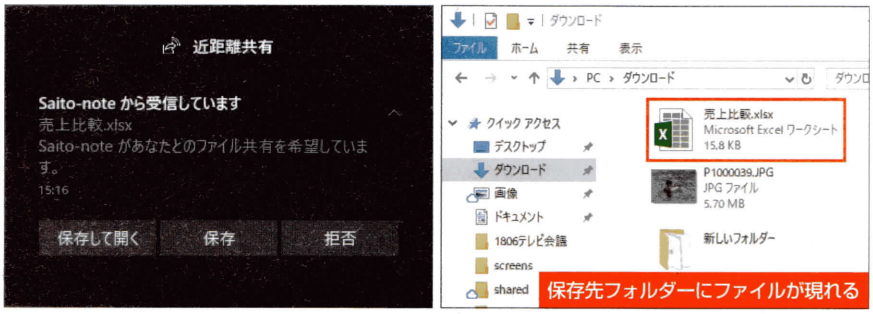


図5　受信側にはファイル受信の通知が届き、アクションセンターなどで確認できる（左）。通知画面で「保存」を選ぶと、保存先に指定したフォルダーにファイルが現れる（右）

図6　近距離共有は、Webブラウザー「Edge」で開いているページのURLの送信や（左）、「フォト」アプリで開いている画像の送信などにも利用できる（右）

## ●AndroidアプリでWindows 10パソコンとやり取りする

**Microsoft Launcher**
提供：米マイクロソフト　対応：Android

図7　画面を右へスライドして表示されるファイル名の右の「：」をタップし、開くメニューで「PCで続行」を選ぶ（左）。「PCに送信」画面で相手をタップする（右）

有」を選ぶ。開く画面で、相手のパソコン名を指定する（図4）。

すると、相手のパソコンには、ファイルが送信された旨のメッセージが表示される。メッセージ内にある「保存」「保存して開く」などのボタンをクリックすると受信できる。受信したファイルは、相手側が図2右の画面で指定したフォルダーに保存される（図5）。

近距離共有は、Windows 10標準のWebブラウザー「Edge」や写真ビューワー「フォト」などからも利用できる。Edgeの場合は、現在開いているWebページのURLを送信できる。受信側のWindows 10パソコンでは、そのWebページが自動的に開く。フォトでは、現在表示している写真ファイルを送れる（図6）。

例えばEdgeの場合、Webブラウザーを開いた状態で、ツールバーの「共有」ボタンをクリックする。すると、図4右と同様の相手先を指定する画面が表示されるので、相手のパソコン名を選べばよい。

Androidスマホの場合、近距離共有と同じような操作で、スマホでの作業内容をWindows 10パソコンで続行することも可能だ。Androidスマホ向けに米マイクロソフトが公開している「Microsoft Launcher」アプリを利用する（図7）。

このアプリは、スマホのホーム画面や壁紙をカスタマイズするなどの機能のほか、パソコンとの連携機能も搭載している。あらかじめパソコンと同じMicrosoftアカウントを使って連携させておけば、スマホ内のファイルをパソコン側へ簡単に送信できる。

**URL▼**
インターネット上で情報の所在と取得方法を指定するための記述方式。uniform resource locatorの略であり、Webブラウザーのアドレス欄に表示される。

**常駐プログラム▼**
常に動作している状態のアプリやツールの総称。Windowsではタスクバーの右端にある通知領域に常駐プログラムのアイコンが表示される。



# クラウドストレージ「OneDrive」を活用する

Windowsが備えるクラウドストレージ機能の「OneDrive」は、実際にはインターネット上のサーバーにファイルを保管するサービスだ。Microsoftアカウントでサインインして利用する。5GBの容量まで無料だ。

OneDriveの機能は、Windows 8以降なら最初から組み込まれている。Windows 7ではOneDriveのWebサイトからアプリをダウンロードしてインストールすれば利用できる。

OneDriveの機能で便利なのは、クラウド保存の内容と、パソコン内の指定したフォルダーの内容を、自動的に同期して常に最新の状態にできること。つまり、同じMicrosoftアカウントでサインインした複数のパソコン間で、自動的にフォルダーの内容を同じにできるわけだ。明示的にファイル送受信の操作を行うことなく、同じファイルを簡単に利用できるようになる。

## OneDriveを利用する

パソコンでOneDriveアプリを初めて起動したときは、Microsoftアカウントを登録し、同期用のフォルダーを指定する（図1）。

OneDriveアプリはいわゆる常駐プログラムで、常に背後で動作する。設定を行うには、タスクバー上の雲形アイコンを右クリックし、開く画面で「⋮」→「設定」と選んで設定画面を開く（図2）。「アカウント」タブでは、現在使用しているOneDriveの容量などを確認できる。「設定」タブでは、後述する「ファイルオンデマンド」などの機能のオン／オフを

### ●パソコン側のOneDrive機能を設定する

図1　OneDriveを初めて起動したときは、Microsoftアカウントでサインインする（左）。また、エクスプローラーには同期用の「OneDrive」フォルダーが設定され、場所の変更も可能だ（右）

図2　OneDriveの設定を行うには、タスクバー右側の通知領域にある雲形のアイコンを右クリックし、開く画面で「⋮」をクリック。メニューから「設定」を選ぶ（左）。「アカウント」タブではストレージの使用量などを確認できる（右）

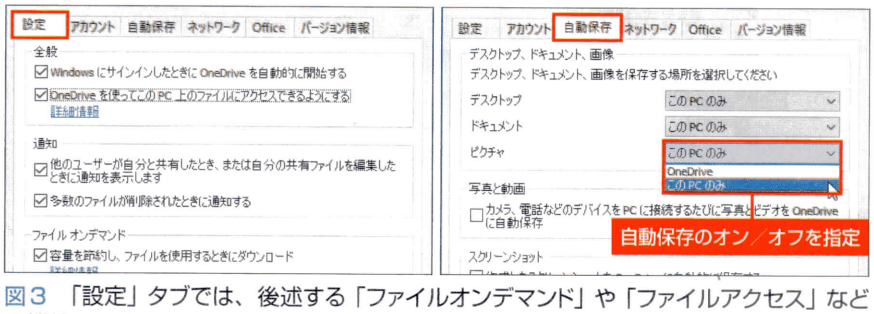


図3　「設定」タブでは、後述する「ファイルオンデマンド」や「ファイルアクセス」などの機能をオンにできる（左）。「自動保存」タブでは、「デスクトップ」「ドキュメント」などのフォルダーに保存したファイルをOneDriveに保存するといった設定が可能だ（右）

### ●OneDriveの同期用フォルダーを開く

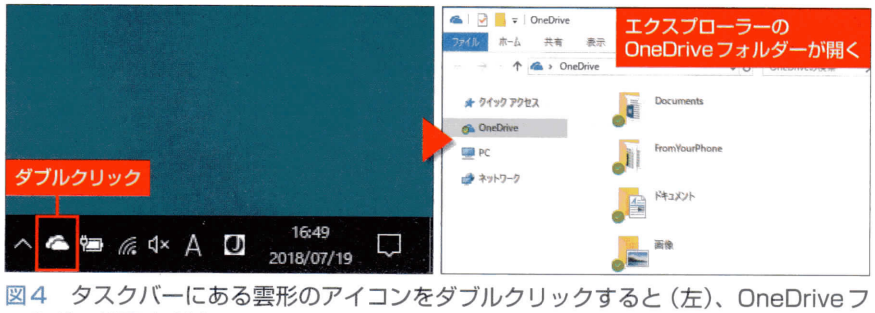


図4　タスクバーにある雲形のアイコンをダブルクリックすると（左）、OneDriveフォルダーが開く（右）。ここに入れたファイルやフォルダーは、同じアカウントのパソコンやスマホで自動で同期できる

### ●WebブラウザーでOneDriveを利用する

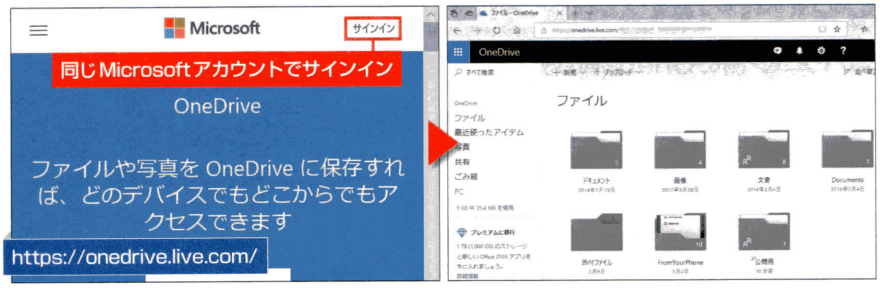


図5　WebブラウザーでOneDriveのページを開き、「サインイン」をクリックしてパソコンと同じMicrosoftアカウントでサインインする（左）。これでOneDrive内のファイルやフォルダーが表示される（右）

図6　ファイルを選択して「ダウンロード」を押すとパソコンに保存される（左）。ExcelファイルなどはWebブラウザー画面で表示と編集ができる（右）

### ●OneDriveのファイルを知人に公開する

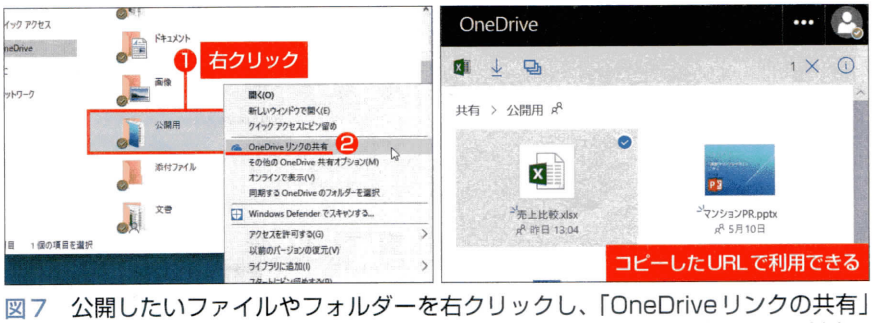


図7　公開したいファイルやフォルダーを右クリックし、「OneDriveリンクの共有」を選ぶとURLがコピーされる（左）。そのURLで開くとファイルを利用できる（右）

### ●スマホアプリから利用する

**Microsoft OneDrive**
提供：米マイクロソフト　対応：Android/iOS

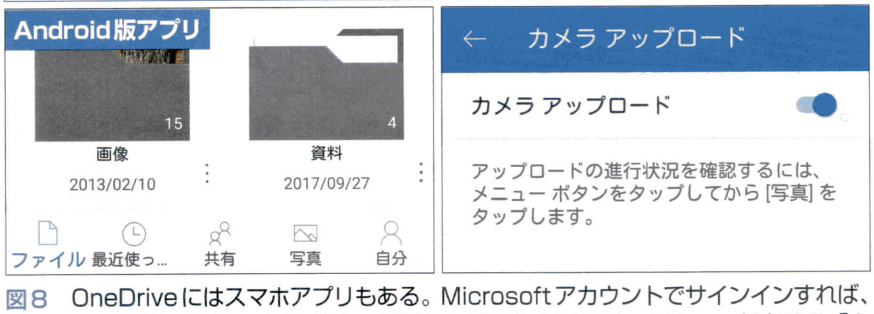


図8　OneDriveにはスマホアプリもある。Microsoftアカウントでサインインすれば、パソコンと同様に操作できる（左）。撮影した写真を自動でOneDriveへ保存する「カメラアップロード」といった便利な機能もある（右）

指定する（図3）。「自動保存」タブでは、「デスクトップ」など特定のフォルダーの内容を自動的にクラウドストレージに保存する設定が可能だ。

パソコン内にあるOneDrive同期用のフォルダーを開くには、タスクバーの雲形アイコンをダブルクリックする（図4）。例えば、このフォルダーにファイルを保存すると、自動的に同期が始まり、クラウドストレージに保存される。同期が終了したファイルやフォルダーには、チェックマークが付く。

## Webブラウザーでも使える

OneDriveアプリがないパソコンでも、Webブラウザーを使ってクラウドストレージを利用できる。

OneDriveのWebページを開き、自分のMicrosoftアカウントでこのサービスにサインインする。すると、OneDrive内のファイルやフォルダーが一覧表示される（図5）。

OneDrive内のファイルをダウンロードするには、ファイルをクリックして選択し、メニューの「ダウンロード」を選ぶ（図6）。ExcelやWordなどで作成したファイルの場合は、オンライン版のExcelやWordを使ってWebブラウザー画面のまま内容の閲覧や編集ができる。また、ファイルをアップロードしたい場合は、ファイルをWebブラウザーのOneDrive画面内にドラッグすればよい。

OneDriveに保存したファイルやフォルダーは、第三者に公開も可能だ。特定の相手にファイルを送るという使い方もできる。OneDriveフォルダー内のファイルを右クリックして、「OneDriveリンクの共有」を

選ぶと、ファイル入手先のWebページのURLが、クリップボードにコピーされる（図7）。そのURLを相手に送り、相手がWebブラウザーで開くとそのファイルを利用できる。

OneDriveには、スマホ用アプリも用意されている。同様にMicrosoftアカウントでサインインすれば、保存してあるファイルを簡単に利用できる（図8）。

## パソコン上の容量を節約

OneDriveアプリを使うと、クラウドストレージに保存したファイルと同じものが、パソコン内に設定したOneDriveフォルダーにも保存される。しかし、携帯ノートなどストレージ容量が小さいパソコンだと、容量不足が生じる場合もある。そんなときに役立つのが「ファイルオンデマンド」機能だ（図9）。

これは、ファイルの情報だけをパソコン内に保管し、ファイルを開くときに初めて実体をダウンロードするというもの。これなら、使わないファイルは情報だけになるので、容量を大きく減らせる。ファイルが情報だけなのか、実体もダウンロード済みなのかは、ファイルのアイコンと一緒に表示されるマークで確認できる（図10）。

ファイルオンデマンドを有効にするには、図2の手順などで設定画面を開き、「設定」タブの「容量を節約し、……ダウンロード」をチェックする（図11）。OneDriveフォルダー内のファイルに付くマークが、従来のものから図10のものに変更される。

内容確認や編集のためダウンロードしたファイルを、情報のみの状態

●「ファイルオンデマンド」でパソコンのストレージ容量を上手に使う

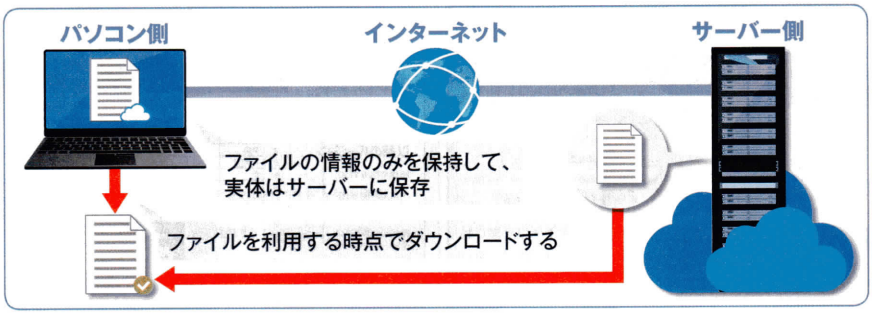


図9　「ファイルオンデマンド」は、ファイルの実体をサーバーに保存し、パソコン側にアイコンだけを表示する機能。ファイルを開いたときに実体がダウンロードされ、編集できるようになる。タブレットなど、内蔵ストレージの容量が小さいパソコンで特に役立つ

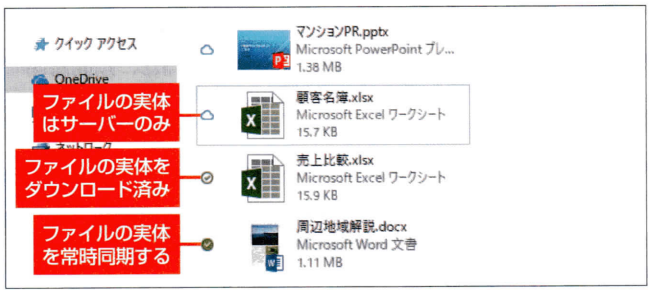


図10　ファイルやフォルダーの状態は、アイコンの横に表示されるマークで確認できる。ファイルオンデマンドでは、3つの状態がある

●ファイルオンデマンドを利用する

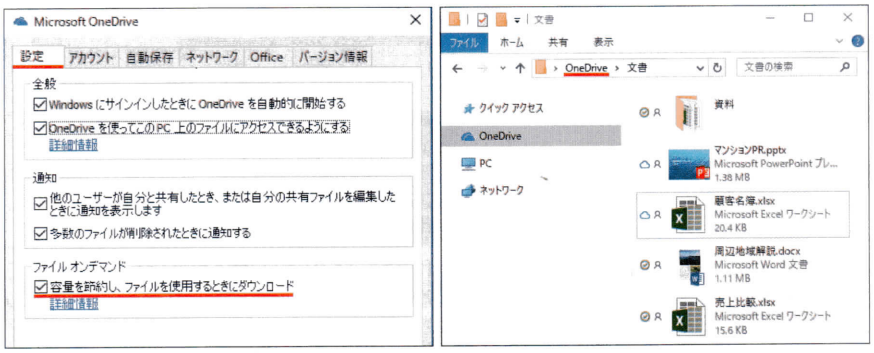


図11　タスクバーの通知領域などから設定メニューを開き、「設定」タブの「ファイルオンデマンド」の「容量を節約し、……ダウンロード」にチェックを付ける（左）。すると、Onedriveフォルダー内のファイルなどのマークが変更される（右）

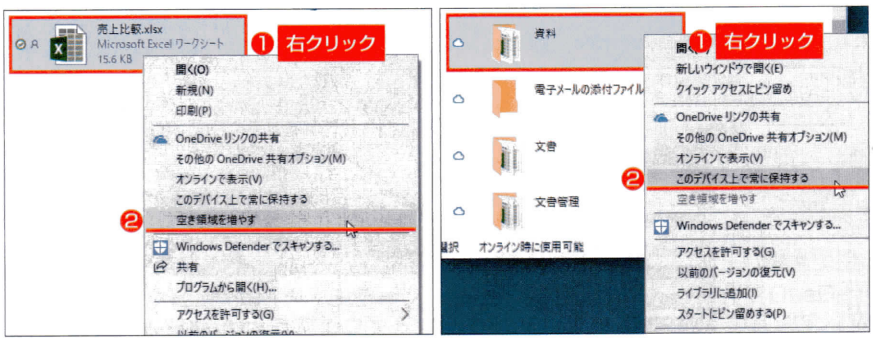


図12　いったんダウンロードしたファイルを情報のみの状態に戻すには、ファイルを右クリックして「空き容量を増やす」を選ぶ（左）。常に同期して最新の状態にしたいときは、右クリックして「このデバイス上で常に保持する」を選ぶ（右）

### ●保存ファイルを古いバージョンに戻す

図13　図5の手順でOneDriveのWebページを開く。復元したいファイルをクリックして選び、メニューから「バージョン履歴」を選択する

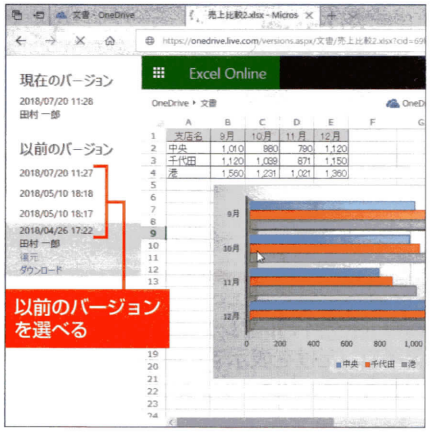


図14　Excelファイルの場合、Webブラウザー画面でファイルが開き、画面左側にバージョン一覧が表示される。「復元」をクリックすると、そのバージョンへ戻る

### ●Microsoft Officeと連携も可能

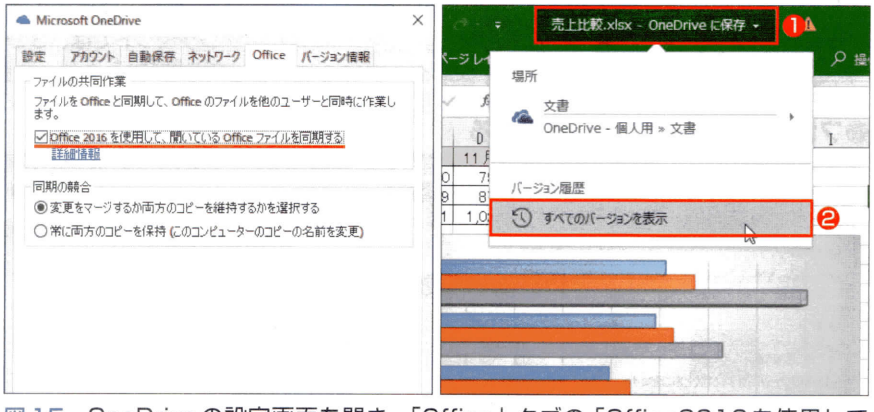


図15　OneDriveの設定画面を開き、「Office」タブの「Office2016を使用して……」をチェックする（左）。OneDrive上のファイルをExcelなどで開き、タイトル部分をクリックして「すべてのバージョンを表示」を選ぶ（右）

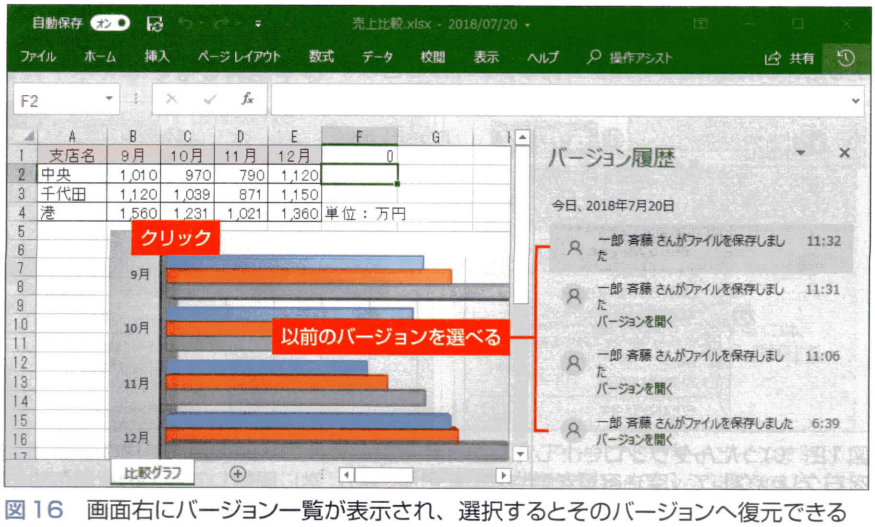


図16　画面右にバージョン一覧が表示され、選択するとそのバージョンへ復元できる

に戻すこともできる。ファイルを右クリックして「空き容量を増やす」を選べばよい（図12左）。

また、利用頻度の高いファイルや重要なファイルなど、常にファイルを最新の状態に同期させておきたいこともある。その場合は、右クリックメニューから「このデバイス上で常に保持する」を選ぶ（図12右）。

## ほかにもある便利機能

OneDriveには、単にクラウドストレージにファイルを保管するだけでなく、さまざまな便利機能がある。それを順に紹介していこう。

まずは、ファイルのバージョン履歴機能だ。OneDriveに保存したファイルは、変更前の古いバージョンに戻すことができる。これは、基本的にWebブラウザーで操作する。OneDriveのWebページを開き、ファイルを選択してメニューから「バージョン履歴」を選ぶ（図13）。ExcelやWordなどで作成したファイルの場合、ファイルの内容が表示され、左側に以前のバージョンが一覧表示される。利用したいバージョンを選んで「復元」をクリックすると戻せる（図14）。

Office 2016なら、古いバージョンへ戻す機能をExcelやWordなどの中から利用することも可能だ。事前に、図2の手順などでOneDriveの設定画面を開き、「Office」タブにある「Office2016を使用して……」をチェックしておく（図15左）。

この状態でExcelやWordなどからOneDrive内のファイルを開くと、ファイルのタイトル部分の右に「▼」マークが付く。タイトル部分をクリ

ックして「すべてのバージョンの表示」をクリックする（図15右）。すると、画面の右に以前のバージョンの一覧が表示されるので、それを選ぶと復元できる（図16）。

次に、出先からパソコン内のファイルを利用する機能を見てみよう。やはりOneDriveの設定画面を開き、「設定」タブで「OneDriveを使ってこのPC上のファイルに……」をチェックしておく（図17左）。すると、別のパソコンからWebブラウザーを使って、設定済みのパソコン内のファイルを利用できるようになる。なお、接続先のパソコンは、電源の入った状態にしておく。

WebブラウザーでOneDriveのページを開き、左の一覧から「PC」を選ぶ（図17右）。開く画面で相手のパソコン名を選ぶと、そのパソコン内のフォルダーやファイルが、Webブラウザー内に表示される。例えば、ファイルを選んで、メニューから「ダウンロード」を選ぶと、ファイルを入手できる（図18）。

Windows 10の「タスクビュー」表示で下側に並ぶ「タイムライン」を使う際にも、OneDriveは役立つ※。タイムラインは、過去の作業履歴を記録し、過去に利用したファイルなどを一発で開けるという機能。同じMicrosoftアカウントでサインインした別のパソコンの作業履歴も参照できる（図19）。

ただし、別のパソコンの作業履歴を開こうとしても、その作業がパソコン内のファイルを対象にしている場合は開けない。OneDriveに保存してあるファイルが対象なら即座に開ける（図20）。

## ●出先から自宅のパソコンへアクセスできる

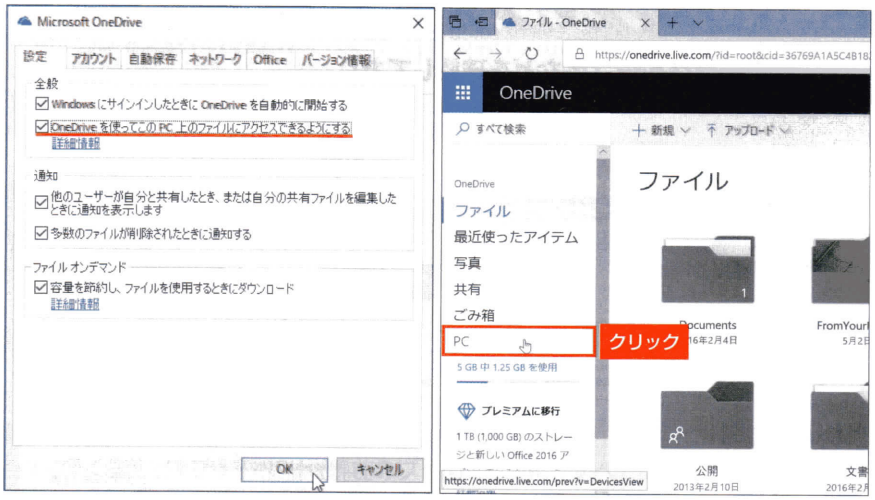


図17　設定画面を開き、「設定」タブの「OneDriveを使って……」をチェックする（左）。WebブラウザーでOneDriveのサイトを開き、左の一覧から「PC」を選ぶ

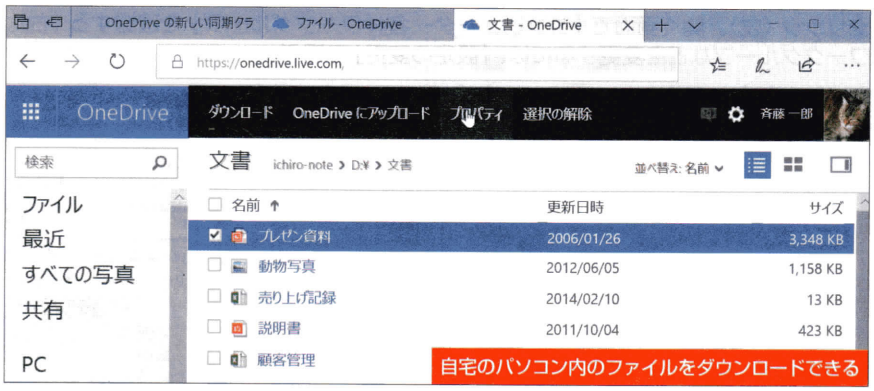


図18　開く画面でアクセスしたいパソコンの名前を選ぶと、そのパソコンに保存してあるファイルを参照できる。ファイルのダウンロードなどが可能だ

## ●タスクビューの「タイムライン」機能と連携する

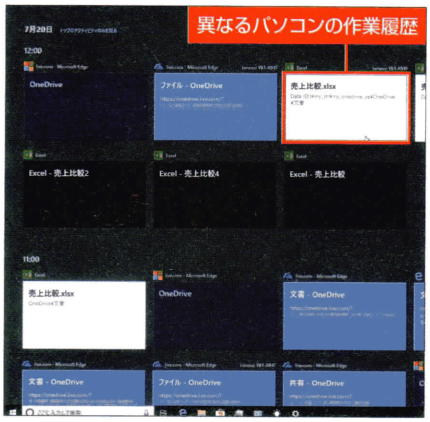


図19　タスクビューの「タイムライン」機能では、同じMicrosoftアカウントで使うほかのパソコンの作業履歴も表示できる。編集対象のファイルはOneDrive上に保存すると、より便利に利用できる

図20　作業対象のファイルをOneDrive上に保存しておけば、ほかのパソコンでの作業履歴からもすぐに開いて作業の続きを始められる。なお、作業対象がほかのパソコン内だとエラーメッセージが表示される

※「タイムライン」はWindows 10バージョン1803（April 2018 Update）以降で利用可能

# LANの「フォルダー共有」でファイルを連携

## ●まずはワークグループ名などを確認しておく

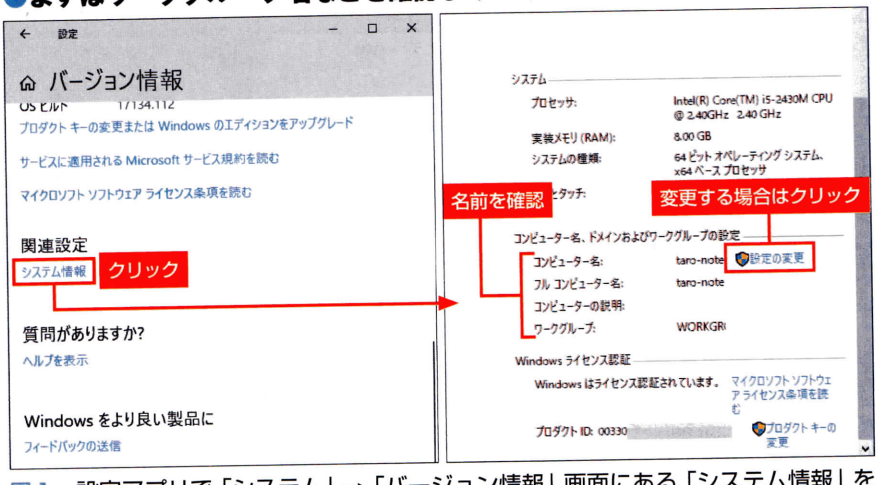


図1　設定アプリで「システム」→「バージョン情報」画面にある「システム情報」をクリック（左）。開く画面で「コンピューター名」「ワークグループ」を確認する（右）。ワークグループなどを変更するには、「設定の変更」を選ぶ

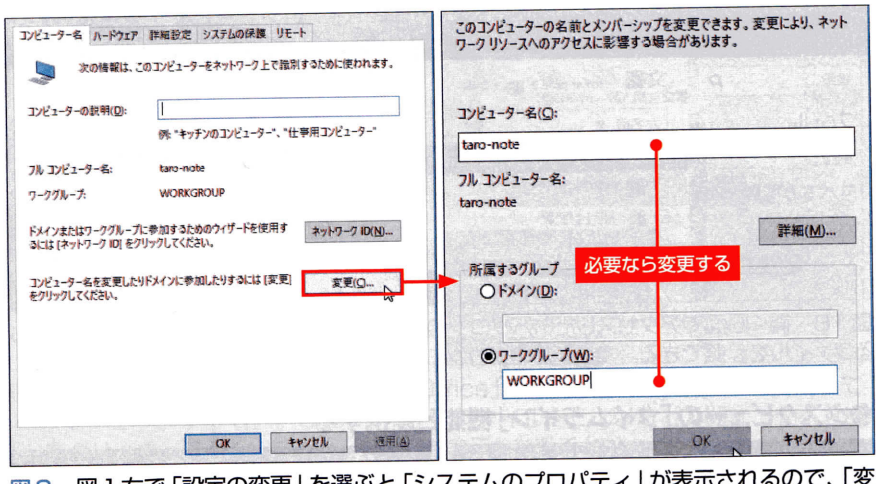


図2　図1右で「設定の変更」を選ぶと「システムのプロパティ」が表示されるので、「変更」をクリック（左）。開く画面で名前を変更できる（右）

## ●フォルダー共有に必要な設定を行う

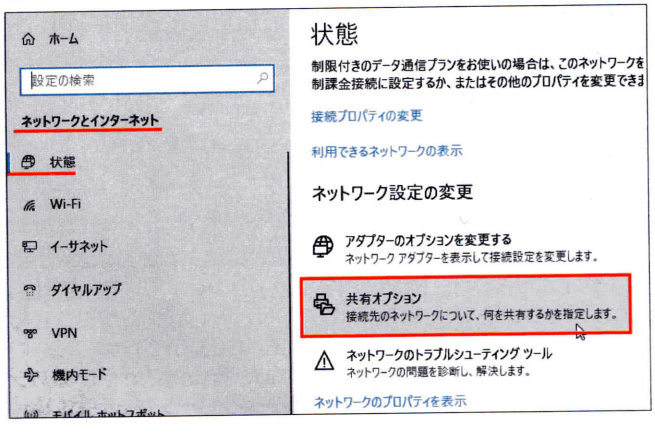


図3　設定アプリの「ネットワークとインターネット」→「状態」画面を開き、「共有オプション」を選ぶ

最後に紹介する「フォルダー共有」は、Windows 7以前から利用されている定番の機能だ。同じLANに接続している複数のパソコンで、いずれかのパソコンをサーバーとして、共有用のフォルダーを指定する。するとほかのパソコンからそのフォルダーへアクセスできる。この共有フォルダーを介して、ファイルをやり取りするわけだ。

今回は、手軽に共有フォルダーを利用するための簡易な共有設定での方法を紹介する。パスワードなしに共有フォルダーを利用できるので簡単だが、セキュリティはやや弱い。自宅内のLANなど、第三者が勝手に利用することのないネットワークでの利用を前提としよう。

なお、従来のWindowsにあった、フォルダー共有を簡単に行う「ホームグループ」機能は、Windows 10のバージョン1803（April 2018 Update）で削除された。ホームグループを利用していた場合、最新版のWindowsではフォルダー共有機能に移行する必要がある。

## まずは必要な設定を行う

フォルダーの共有を行うには、LANに接続したパソコンで、いくつかの設定が必要になる。まずは、「コンピューター名」「ワークグループ」の確認だ。コンピューター名はパソコンを識別するための名称であり、好きな名前を付けられる。ワークグループは、共有フォルダーを利用するパソコンで全て同じ名前にしておく必要がある。初期設定では

「WORKGROUP」となっており、変更せずに使ってよい(図1、図2)。

次に、フォルダー共有機能をオンにする。設定アプリを開き、「ネットワークとインターネット」を選択。開く画面で「状態」を表示し、「共有オプション」をクリックする(図3)。これで設定画面が開く。

まず「プライベート(現在のプロファイル)」をクリックし、表示される項目で「ネットワーク探索を有効にする」「ファイルとプリンターの共有を有効にする」をチェックする(図4)。次に「すべてのネットワーク」をクリックして項目を表示し、「パスワード保護共有を無効にする」を選ぶ(図5)。

これで準備は完了だが、図4で現在のプロファイルが「ゲストまたはパブリック」になっている場合は、第三者からのアクセスが可能なネットワークなので、共有機能の利用はできない。

自宅内など閉じた環境のLANで使っているのにパブリックになっている場合は、図3の「状態」画面で、「接続プロパティの変更」をクリックする。すると、現在接続しているネットワークの設定画面が表示されるので、「ネットワークプロファイル」の「プライベート」を選択して変更しておこう(図6)。

## フォルダーを共有する

準備を終えたら、実際にフォルダーを共有してみよう。共有用のフォルダーは分かりやすいように、Dドライブなどの直下に作成しておくのがお勧めだ。

Windows 10のバージョン1709

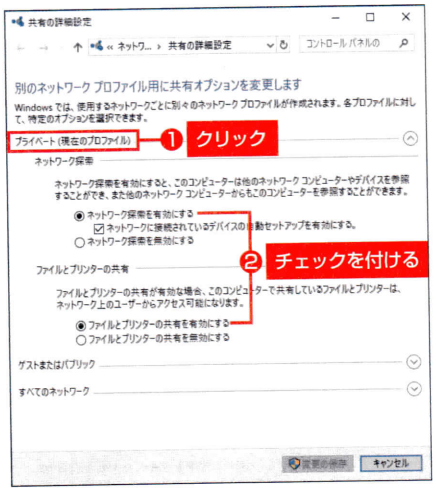


図4 開く画面で「プライベート(現在のプロファイル)」をクリックし、「ネットワーク探索を有効にする」「ファイルとプリンターの共有を有効にする」にチェックを付ける

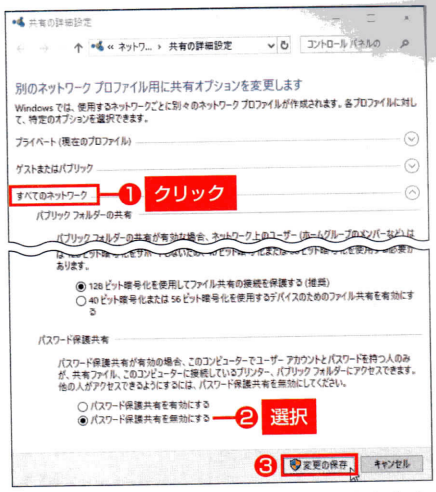


図5 次に「すべてのネットワーク」をクリックして項目を表示し、「パスワード保護共有を無効にする」を選ぶ。最後に「変更の保存」をクリックする

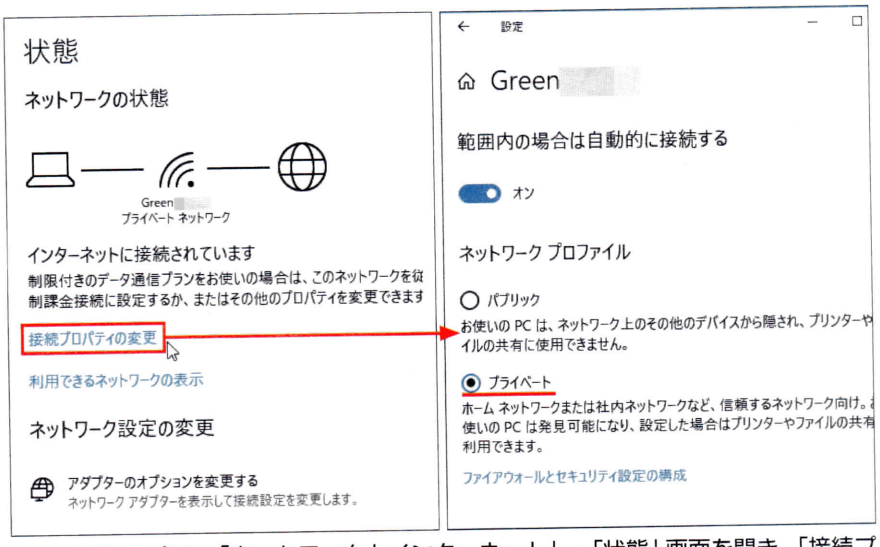


図6 設定アプリで「ネットワークとインターネット」→「状態」画面を開き、「接続プロパティの変更」を選択(左)。開く画面で「プライベート」を選ぶ(右)

### ●共有するフォルダーを指定する

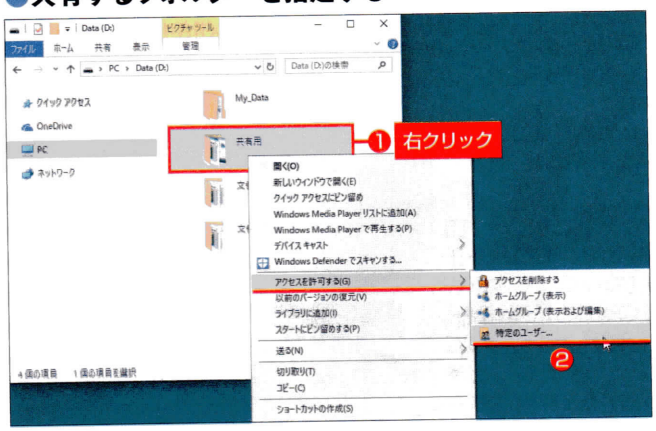


図7 Dドライブの直下などに共有用のフォルダーを作成し、右クリックのメニューから「アクセスを許可する」→「特定のユーザー」を選ぶ

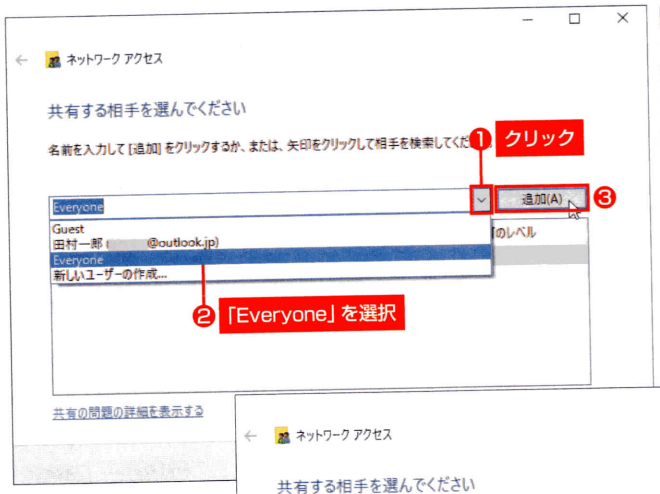


図8 「ネットワークアクセス」画面で、対象ユーザーの一覧から「Everyone」を選び、「追加」をクリックする

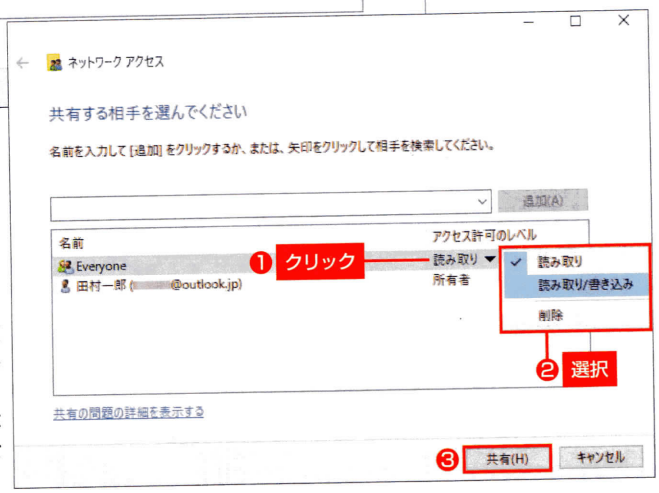


図9 「Everyone」が下の欄に追加されるので、右にある「アクセス許可のレベル」をクリックし、「読み取り／書き込み」などのアクセス権を設定する。最後に「共有」をクリックする。次に確認画面が表示されるので「終了」をクリックする

### ●共有フォルダーをほかのパソコンから利用する

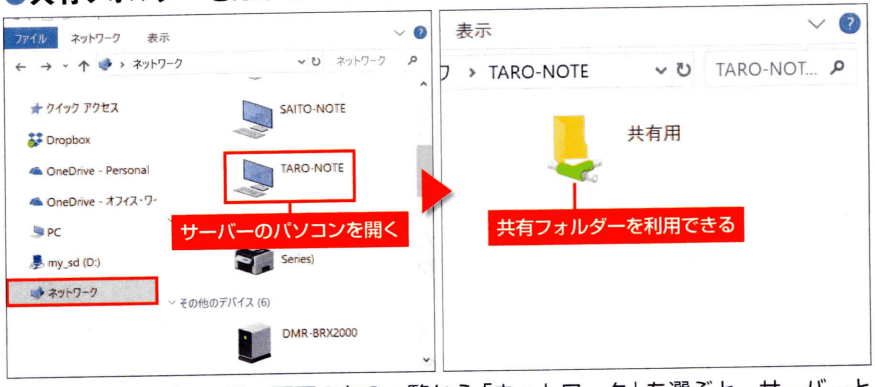


図10 エクスプローラー画面の左の一覧から「ネットワーク」を選ぶと、サーバーとなっているパソコンの一覧が表示されるので、相手をダブルクリック（左）。共有フォルダーが表示される（右）

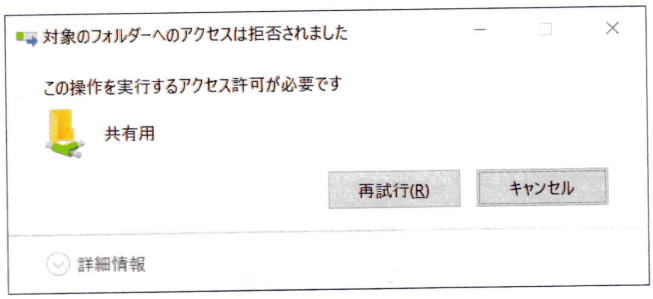


図11 図9でアクセス権を「読み取り」にしている場合、共有フォルダーにファイルを保存しようとすると、拒否のメッセージが表示される

（Fall Creators Update）以降なら、共有したいフォルダーを右クリックし、開くメニューから「アクセスを許可する」→「特定のユーザー」を選ぶ（図7）。それより前のバージョンのWindowsなら、右クリックメニューの「共有」→「特定のユーザー」を選ぶ。

これで「ネットワークアクセス」画面が開くので、フォルダーのアクセス権を設定する。まず上の入力欄の右にあるボタンをクリックし、全てのユーザーを意味する「Everyone」を一覧から選んで、「追加」ボタンをクリックする（図8）。これで、下の欄に「Everyone」が追加される。

次に、追加した「Everyone」をクリックし、右にある「アクセス許可のレベル」を指定する。「読み取り」にすると、ほかのパソコンからはフォルダー内のファイルを読み取れるが、書き込みはできない。「読み取り／書き込み」を選ぶと、どちらも可能になる。最後に「共有」ボタンをクリックする（図9）。

## 共有フォルダーを利用する

別のパソコンから、共有フォルダーを利用してみよう。エクスプローラーを開き、左の項目一覧にある「ネットワーク」を選ぶと、右にサーバーの一覧が表示される。共有フォルダーを設定したパソコンを開くと、共有フォルダーが表示される（図10）。あとは、通常のフォルダーのように、ファイルのコピーなどを行えばよい。なお図9で「読み取り」権限に設定した場合、例えばファイルを共有フォルダーにコピーしようとすると、「……アクセスは拒否されま

した」とメッセージが表示され、コピーはできない（図11）。

共有フォルダーが深い階層にある場合、利用するたびに「ネットワーク」からたどるのは面倒だろう。そのような場合は、「ドライブの割り当て」機能を使うとよい。これは、共有フォルダーを、Cドライブなどの内蔵ストレージのように扱うための機能だ。

まず共有フォルダーを右クリックして「ネットワークドライブの割り当て」を選ぶ（図12）。開く画面で、割り当てたいドライブ文字（ここでは「Z」）を選び、「サインイン時に再接続する」をチェックして「完了」ボタンをクリックする。エクスプローラーの「PC」の下に、「Zドライブ」として共有フォルダーが表示されるので、すぐに開ける（図13）。

共有フォルダーはスマホからも利用できる。内蔵ストレージやSDメモリーカード内のファイルを一覧したりコピーしたりする「ファイラー」と呼ばれるジャンルのアプリがある。その中には、LAN内の共有フォルダーに対応しているものもあるので、それを利用すればよい。Android用なら「ファイルマネージャー」、iOS用なら「Documents by Readdle」などのアプリがある。

「ファイルマネージャー」の場合、Wi-Fiと同じLAN上のサーバー名一覧が表示されるので、相手を選択。表示されるユーザー名とパスワードを入力する画面で、「匿名」をチェックして「OK」をタップすると、共有フォルダーが表示される。あとは、コピーなどの操作でファイルをやり取りできる（図14）。

## ●共有フォルダーへ簡単にアクセス

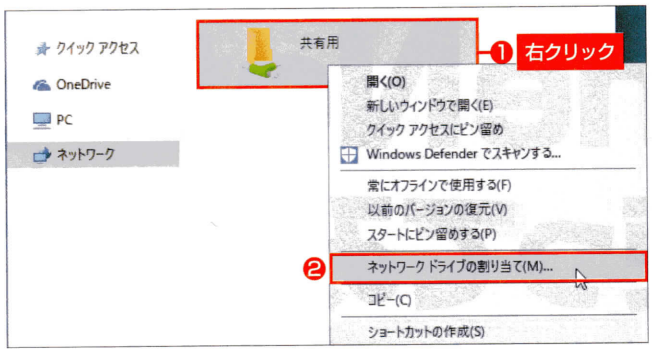


図12　共有フォルダーを右クリックし、開くメニューの「ネットワークドライブの割り当て」を選ぶ

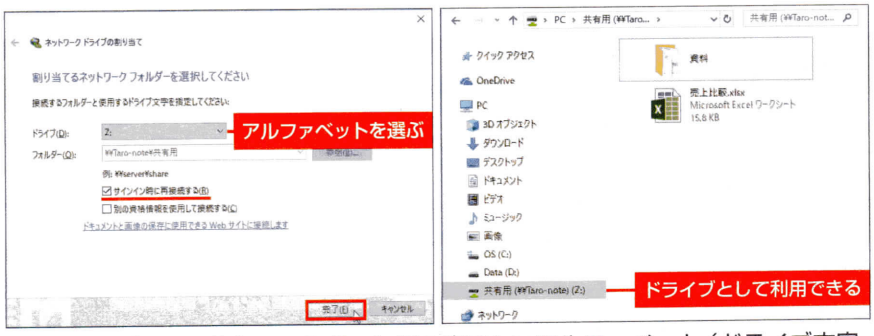


図13　開く画面で共有フォルダーに割り当てたいアルファベット（ドライブ文字、ここでは「Z」）を指定し、「サインイン時に再接続する」にチェックを付けて「完了」を押す（左）。これで共有フォルダーが、Zドライブとして利用できる（右）

## ●Androidスマホからも利用できる

図14　メニューから「リモート」→「リモートロケーションを追加する」→「ローカルネットワーク」を選ぶと、サーバーの一覧が表示されるので、相手を選ぶ（左上）。次の画面では「匿名」をチェックして「OK」をタップする（上）。これで共有フォルダーを利用できる（左）